

# 「Panda 杯全日本青年作文コンクール 2016」 訪中プログラム感想文



公益財団法人日本科学協会  
業務部国際交流チーム

# 目次

## ★「Panda 杯全日本青年作文コンクール 2016」訪中プログラム感想文

熊本大学 文学部文学科 2年 後藤翔	2
一橋大学大学院 社会学研究科地球社会研究専攻 1年 山本綾子	2
株式会社ユーグレナ 管理部総務人事課 山口真弓	4
安田女子大学 文学部書道学科 2年 井ノ下千夏	5
筑波大学附属高校 1年 角南沙己	5
東京学芸大学 教育学部 2年 佐野桃子	6
宮崎公立大学 人文学部国際文化学科 4年 大久保弘樹	7
私立仙台育英学園高等学校 2年 門馬涼	7
創価高等学校 3年 北條久美	8
大妻女子大学 人間関係学部 濱田麻衣	9
創価大学 通信教育学部 教育学部 村上恵理	10
熊本大学 文学部 コミュニケーション情報学科 2年 岩野美咲	10
法政大学 国際文化学部 3年 長橋侑生	11
県立広島大学 経営情報学部 経営学科 3年 流森健吉	11
聖心女子大学 1年 和田葉奈	12
東北大学大学院工学研究科 ロッケンバッハ怜	14
お茶の水女子大学 文教育学部 1年 斎藤萌香	14

## 仮面を剥がすところから

熊本大学 文学部文学科2年 後藤 翔



「仮面を剥がすところから始めてみよう。」

そう強く感じた。

私はこの研修に参加するまで、中国という国に対して全くと言っていいほどいいイメージを持っていなかった。私の中で中国は、テレビや新聞等のメディアによる報道によって偏見や独断で塗り固められた分厚い仮面を被っていた。冷たい、日本を嫌っている、マナーが悪い、そんなイメージばかりだった。今振り返ってみれば、なんて自分本位で身勝手な印象だったのだろうと思う。

しかしそんなイメージはこの研修によって180度反転したといっても過言ではない。

人民中国をはじめとする現地でお会いした中国の方々は皆、私たちを手厚く歓迎してくださいました。私がルームキーをなくして困っていた時ホテルの従業員の方は、中国語がしゃべれない私の意をなんとかしてくみ取って、手助けをしてくださった。露店で出会った陽気なおじさんは拙い日本語であいさつをしてくれた。よくわからないカードを買わされそうにはなったけれど。

そこに、私が抱いていたイメージの中国人は一人としていなかった。日本のメディアで報道される中国人は13億人のうちのほんの一部でしかなくて、実際に私たちが会って、触れ合った中国人はそれとはまったく違っていった。私の見ていた「中国」は日本という国が巧みに作り上げた虚像でしかなかったのではないだろうか。

研修1日目の中国人民大学での学生との交流会で「日中関係は、実際に見てみないと本当の顔はわからない」と中国の大学生が言っていた。彼の話す日本語は、日本人の話すそれに比べても遜色はなく、注意して聞かなければ日本人と間違えてしまうほどだったのを覚えている。確かにその通りであると、私は強く思った。もしかしたら、私たちが日本で見ていた中国の顔は仮面に覆われていて、自分で確かめたものこそが本当の顔なのではないだろうか。

私はこうしてこの文章を打っている間に、中国で出会った様々な優しい中国人を一人ひとり指でなぞるように大切に、丁寧に思い出している。彼らはみな、私に仮面を取って接してくれたし、私も当然「本当の顔」で接していた。

自分の目で見て、手で触れて、感じたものこそが「本当の顔」である。これから先の未来、日中関係の今後を担うのは私たち若者だ。そうなったとき、私たちが先頭に立って、日中関係の良好化を図っていきたいとこの1週間で思った。

来るべき未来に備えて、「仮面を剥がすところから始めよう」と思う。

### 一人ひとり、そして団結の日中友好に触れて

一橋大学大学院 社会学研究科地球社会研究専攻 1年 山本 綾子



まず始めに、本コンクールの受賞式並びに訪中旅行において陰に陽に支えて下さいました全ての方々に心より御礼申し上げます。

中国は、文化的なモノや前向きで個性的な人々で溢れており、躍動感を感じる国でした。この経験を通して、中国語や中国研究への熱意が増すとともに、実際に現地へ

行き、現地の人々と触れ合うことの大切さを改めて学びました。

今回の訪中で心に残ったことは、「団結」、「温かさ」、そして「先駆」です。

まず、様々な立場とかたちで日中友好に携わる方々の「団結」の姿が印象的でした。雑誌社、日本語専攻の学生、中国語教師、中国でビジネス展開を行う企業人、友好都市間を繋ぐ公の人、また外交や交流に携わる人としての立場。日本で雑誌を発行したり、日本語を学んだり、中国語を教えたり、中国経済の発展に携わったり、友好都市や交流の絆を深めたり。これだけ多くの日中友好への関わり方を目の前で見る事ができたこと自体、貴重な経験でした。国交に携わる立場やかたちは様々ありますが、其々の人々が繋がりをもち、団結しているからこそ人的交流や文化交流が成り立っており、日中友好が促進されていることを皆さんが協力し合う姿を見て実感しました。

また、多くの「温かさ」に触れることができた旅行でもありました。正直、中国の官公庁に勤める方々は、厳格で近づきづらいというイメージがありました。イメージとは対照的に、大らかでユーモアに溢れた人民中国雑誌社の皆さんの姿は、この旅で私の中国への先入観を一番変えてくれました。7日間、衣食住を共にした皆さんは、私にとってかけがえのない親類となりました。特に、外文局の独身寮で火鍋を食べ、中国人と一つの鍋を突き合ったことは本当に良い思い出です。加えて、今回の訪中に伴い、揚州市は最も情報を得ることが難しく、イメージしづらい都市でした。訪中前に揚州について知っていたことは、同じ大学院に「揚州チャーハン」の研究をしている中国人がいるという程度でした。訪中前に揚州について調べようかと思いましたが、他国を訪問する時は調べすぎると先入観の塊になってしまうため、むしろ調べず、先入観をもたずに訪問することも時には大切であると聞いたことがあったため、敢えて揚州については全く調べずに行きました。固定概念がなかったからこそ、訪れた時の感動は何倍もありました。揚州による歓迎は寝台列車の中から既に始まっていました。同じブースで寝ることになった高校生や大学生など、多くの方々が気さくに話しかけてくれ、揚州について教えてくれました。また、揚州に入ると、景観が守られた市街地や庭園の美しさに魅了されました。何より、歓迎会での揚州市長の私たち参加者への温かい言葉や期待に感動しました。参加した誰もが、お母さんのようなぬくもりと温かさを感じたと思います。揚州に住んでみたいと心から思いました。

更に、日中友好の「先駆」の姿を見せて頂くこともできました。森ビル株式会社の方による講演では、ビジネスという舞台を通して中国に長く携わり、道なき道を拓いてきた姿に心から感動しました。私は、社会人の経験があるため、異動などもあるサラリーマン業の中で、中国の担当でい続けることを実現すること、思い切った判断をすること、泥臭い中でも頑張ること、縁を大切にすることの難しさを若輩ながら少しは理解しているつもりです。そのため、ビジネスを通して日中友好に貢献するという貴重な先駆の姿だと思いました。公の立場で両国の友好に携わることのみ考え始めていた私に「ビジネスの舞台でも努力すればここまでできるよ！」と言って下さっているようで、再考するきっかけを与えて下さった貴重な機会でした。また、横浜市役所上海事務所の方が、社会人になっても日中友好の思いを持ちつづけ、今いる場所で努力し続ければ必ず道が繋がり拓けていくことを教えてくださいました。山あり谷ありの人生を経て、夢を実現されてきたお話しを通して、やはり夢を実現するには熱意を持ち続けることが大切であることを学びました。今回の旅行で、中国人の方だけでなく、日本人の方とも素敵な出会いがあったことは大変嬉しかったです。

最後に、『人民中国』の編集長より「10年後を目指そう！」と発表がありました。10年後、日中友好や中国に貢献する人材（有識者）に育とうという目標です。今後の私の人生にとって、意義深く素晴らしい目標を頂くことができたと思っています。私の夢は、両国の人々が友誼のために往来する世界づくりに貢献することです。10年後、その夢を実現することができるよう頑張りたいと思います。これからも一緒に訪中したメンバーと「団結」し、お世話になった方々の「温かさ」への恩を忘れず、「先駆」をきる成長をしていきたいと思っています。

## 訪中を終えて

株式会社ユーグレナ 管理部総務人事課 山口 真弓



中国を訪問してからあっという間に1週間以上たちました。今振り返ってみても中国を訪問したあの1週間は濃く、夢のような1週間でした。1週間しか一緒にいれなかったけれどあの時出会った仲間、体験できたことは自分の中で大切な宝物となり、今、あの1週間のことを思い出すと自然と胸があつくなります。

私は大学時代から社会人2年目まで縁があり何度か中国へ行く機会に恵まれました。何度か中国に行っているうちに、中国や中国語が大好きになりましたが、転職後は中国に関係する仕事から離れてしまい、すっかり中国と疎遠になってしまいました。そのため今回中国へ行けるチャンスを掴めたと聞いたとき、心の底から嬉しく、家族にすぐに電話で報告をしました。

1週間のスケジュールはとても盛りだくさんで、多くの収穫がありました。中国人の方は本当に皆優しく、十分すぎるほどのおもてなしを受けました。例えば食事中には「これも食べな」と取り分けてくれたり、「おなか一杯ですか？足りなければ注文しましょうか？」と気を遣ってくれたり、様々な場面で、細かい部分まで私たちを楽しませようとしてくれるのが十分に分かりました。また、途中予想外のことがありましたが、臨機応変にスケジュール変更を対応している中国人の強い姿を見て、日本人にはない強さを学ぶことができました。

また一緒に訪中した日本人からも学ぶことが沢山ありました。中国語が分からなくても一生懸命中国人に自分の気持ちを伝えようとしているのを見たり、たくさん話を聞いて素直に学ぼうとしたりする姿勢をみて、いつの間にか忘れていた挑戦する勇気や素直に相手の良さを認める気持ちを思い出しました。

今回の訪中で中国の良さを改めて感じるとともに、忘れかけていた自分自身を見つめ直すよいきっかけを得ることができました。社会人になり、忙しい日々を過ごす中で、いったん立ち止まり、自分を見つめ直すことができたこの1週間は本当にいい経験でした。これからは今回の訪中で得た縁を大切に、この経験を人に伝えて、また何かの形で中国に恩返しができるいいなと思っています。

一週間だけでしたが、一緒に過ごしてくれたみんな、またお忙しい中私達のためにご尽力いただきました人民中国の皆様はじめ各関係会社の皆様、本当にありがとうございました。いつかまた成長した姿で皆様とお会いできることを楽しみにしております。



今回初めての訪中だった私にとって、中国の全てが新鮮でした。隣国であるにもかかわらず、全く違った景色が広がる毎日に気分は高揚するばかりでした。

初日の中国人民大学での討論会では、同じ世代の学生と本音で討論する事が出来ました。日本と中国では考え方も異なるものの、お互い尊敬しあっている部分があり嬉しかったことを覚えています。中国も日本の事が嫌いなのだろうと、勝手に偏見を持っていた部分もあるだろうし、現地での声を聞いたことは私の大きな財産となりました。

また万里の長城をはじめ、北京は非常に寒く、日本では肌を刺すような寒さと表現しますが、骨を切る寒さと表現した方が良いのではと思うくらいでした。

揚州では、中国古来の風景が広がる瘦西湖、鑑真ゆかりの地である大明寺、また揚州総博物館で歴史を学ぶことが出来ました。中国から日本へ脈々と受け継がれてきたもの、また中国の文化として成り立っているものがあり、もう一度時間をかけて巡りたい場所です。

北京、揚州の景色とガラッと変わったのは上海です。近代的なビルが立ち並び、展望台から見る夜景は格別でした。そして日本でも高く評価されている魯迅の地も巡り、都会的な上海、昔ながらの上海の二つを見る事が出来ました。

場所も変われば気候も変わり、食べ物も変わります。北京ダック、揚州チャーハン、小籠包…どれも舌鼓をうつものばかりでした。

しかし変わらないもの、それは人の温かさでした。朝食バイキングでどこの席に座ろうと困っていた時、「あそこが空いているから座りな」とコックさんが助けて下さいました。また、寝台列車で同室の方が仲良くして下さい、楽しい一夜を過ごしました。

今回の訪中を経て、私は何より考え方が変わりました。全てを純粋に受け入れるという事です。文化が違う為、最初はビックリすることの連続でした。しかし一週間という短い時間の中でも、中国の方の温かさに触れる事が出来ました。何度も行きたい、もっと色々な土地を巡りたい、そのような気持ちで今もいっぱいです。今回の訪中で出会えた全ての人に感謝します。

### 中国研修旅行感想



今回の訪中では今まで見たことのない中国の一面をまた新たに知ることができ、とても楽しく充実した一週間でした。特に自分は日本人であるという立場をより意識し、客観的に中国人の目に日本がどう写っているのか、また日本は今後どう中国と接していくべきかを考える機会となりました。過去に六回訪中の経験がありますがまだまだ知らないことが多いと思われ、つくづく中国の魅力を感じています。

最も痛切に感じたことはいかに多くの人々が長い間、日中関係改善を望み一生懸命両国のために活動されてきたか、ということです。

「渡尽劫波兄弟在 相逢一笑泯恩仇」

魯迅の残したこの言葉からは日中関係の未来に期待を持ち信念を貫く姿を感じられます。幼い頃唐招提寺で鑑真の像を見た私は、大明寺で鑑真像を見た時に不思議と忘れかけていた記憶との確

かな繋がりを感じ嬉しく思いました。改めて歴史の深さに感銘を受けたとともに二国間の繋がりが見え、胸が高鳴ったのも覚えています。今回の訪中を通しての出会いの数々はどれも尊く素晴らしいものでした。人民中国の社員の方々、意見交換会で語り合った人民大学の学生たち、万里の長城で「我喜欢日本」と言ってくれた見知らぬおじさん、寝台列車の中で言葉の通じない私達の荷物を運び助けてくれたおばさん、揚州や書道についていろいろ教えてくれた優しいおばあちゃんたち... どの出会いも私にとってかけがえのないものとなり、心に深く刻まれました。

私たち若者は実際に face to face で中国人との交流を重ね、10年後20年後の日中関係のさらなる改善に努めていく責任があると思います。両国を理解しあうにはまだまだ時間がかかるかもしれません。正直中国という大国を学んでいて、素晴らしいと思える文化もあればなかなか理解が難しい部分もあります。中国に限らず他のどの国に対してもそういった両面を感じることは自然なことです。しかし一方的な見方で国全体を見るのではなく多方面から知ることが大切である、ということはこの一週間深く感じました。私達若者に出来ることは、自らの目でみて人と触れ合って信頼関係を構築し、感じた素直な気持ちを忘れることなく多くの人に伝えていくことだと私は思います。

現地で多くの貴重な体験をさせて下さり、今まで知らなかった中国に気付かせてくださった人民中国の方々に深く感謝します。また、日本科学協会をはじめパンダ杯を支えて下さった全ての方に感謝したいと思います。そして素晴らしい受賞者たちと出会えたことを有り難く感じています。中国に関する十人十色の経験、思い出のある方々との交流はとても新鮮で幸せでした。メディアの報道は様々ありますが、多くの面で日本と異なる文化、習慣、国民性を持つ中国が私は大好きです。是非また中国を訪れ、より多くの中国人と交流をしてさらなる発見をしていきます！

## 出会いが紡ぐ

東京学芸大学 教育学部2年 佐野 桃子



今回の研修旅行では、中国人民大学の学生との討論や、中国大使館や外文局での授賞式など、日常生活では体験できないような経験ができました。また、程永華大使はじめ、上海森ビル総経理の星屋秀幸氏、そして人民中国の方々、日本科学協会の方々など、こちらも普段お会いできないような方々と出会うことができました。さらに、今回一週間共に過ごした団員は、これからの日中関係を見ていく上での心の支えになるような素敵な仲間となりました。梶団長のお言葉にもあったように、こうした出合いや経験は「一期一会」です。出合いや経験が、人生という糸を紡ぎ出して、豊かなものにしていくのだと感じています。

また、私は教育学部に所属し、将来は教師になることを夢見ています。上海森ビル総経理の星屋氏の「若者に日中関係の将来を担ってもらいたい」というお言葉を拝聴したり、魯迅先生の文学の本随に在る「文学で国民の精神を改造する」といった精神を学んだりする中で、期待の意を込めた投資的「教育」の重要性を強く感じました。こうした恵まれた機会を真摯に受けとめ、日中両国の関係良好に努めていかななくてはならない、御恩を何かしらの形で返したい、と考えております。

## この旅でしか、見えない景色があった

宮崎公立大学 人文学部国際文化学科 4年 大久保 弘樹



私は、以前に中国に留学したことがあり、何度も中国に足を運んでいたのですが、当初は今回の訪中に大きな驚きはないだろうと思っていた。しかし、そうではなかった。私がこの旅で最も記憶に残っているのは、この旅を共にした「人」である。

旅を共にした受賞者の青年たちは、みな各々に自分のストーリーを持っていて、中国への想いを抱いていて、それは、その人にしかない輝かしいものであった。中国の街中で、ある時は真夜中の寝台列車で、私たちはいつまでもその想いを語り合った。

そして、今回の訪中を支えてくださった人民中国をはじめとした多くの関係者の方々。私は、揚州の美しい風景にも感動したが、何よりも日中友好に尽力されているみなさんの姿に、強く心を打たれた。私が見えない所で、こんなにも真摯に日中友好を考えている日本人、中国人がいること、そして、そのような方々のプロフェッショナルとしての姿を実際に見ることができ、尊敬の念と、私も将来そうなれたら、という憧れの気持ちでいっぱいだった。

自分で飛行機のチケットを買って、中国に旅行に行くことはそんなに難しいことではないのかもしれない。でも、今回の訪中は、この旅でしか出会うことが出来ない人々がいて、この旅でしか、見えない景色がたしかにあった。あの時作文を書いて良かった。と心から思う。宮崎という小さな町で中国語を学ぶ私に、新たな中国の景色を見せてくださって、本当に感謝しています。今回出会った方々とのつながりをいつまでも大事にして、これからも日中友好について考えていきたいです。ありがとうございました。

## 自らの目で見た中国から

私立仙台育英学園高等学校 2年 門馬 涼



私にとって、今回の訪中が中国を訪れる最初の出来事でした。

中国に行く前は、連日メディアを通じて報じられる様々な日中関係のニュースを見て、正直、中国の人や国自体に好印象は抱いていませんでしたし、不安でいっぱいでした。しかし、それは私の先入観だけにすぎませんでした。

実際に中国の学生との討論会や、中国人の家庭を訪れて食事を頂いたり、街の人々との交流を通して、中国の人々は勤勉で非常に真面目だということに気づくことが出来ました。先入観を捨てて、自らの足で中国を訪れて、自らの目で普段見ることの出来ない景色を見て、沢山の大切な事を吸収する事が出来ました。

『大切なこと』

それは、人との繋がりから得られる幸せです。

パンダ杯を通して、日本各地の様々な年齢層の人と出会い、国境を越えて中国の人々とも出会うことが出来ました。そして、その出会いから沢山の幸せを得ました。

これまでの考え方や価値観が変わり、中身が大きく成長したと感ずる素敵な一週間でした。



## 一期一会の出会い、そして私たちの使命

創価高等学校 3年 北條 久美



初めての中国では見るものすべてに自身の想像を超えた感動がありました。街並みはきれいで北京や揚州の歴史を感じるものから中国で最も発展している上海の超高層ビル群、中国で出会った人々は皆心が温かく、さまざまな交流が心に刻まれるものになっています。

私は今回の訪中で主に3つのことを学びました。ひとつ目は、中国とのかかわりを持った人の使命は大きいということです。私は今回 panda 杯作文コンクールで日中友好についてのエッセイを書くまで、この中国研修に行くまで、中国を本気で知ろうなどとは思っていませんでした。ただ語学が好きで中国語を学び始めており、今回このような機会を得られ、中国の学生と直接議論することになった時、自分なんか中国に行っているのだろうかと不安になりました。しかし、北京に到着した2日目の日、人民大学に行くと、多くの学生が、明るく上手な日本語で出迎えてくれ、今まで心配していた事が何か忘れてしまうほどに、嬉しくなりました。そして議論はすべて日本語で行われ、日本と中国の職業観の違いと、日中両国国民の相互印象という2つのテーマについて2時間熱く語り尽くしました。その中で、相互印象については、共通してメディアを通してはお互いマイナスの印象を受けるという一方、個人で見れば、日本のアニメが好き、敬語を使うところが良い、中国人の心に距離を置かないところが好きだ、朝から大きな声を出してすごいなどというたくさんの意見が飛び交いました。日本と中国はどちらも漢字を身近なものとして使い、同じアジア人で顔も似ていて、とても親近感を持ちやすいなと気付きました。そのとおりに私は交流した中国の学生とすぐに仲良くなり、同時に中国がとても好きになりました。今中国や日本に興味を持っていない人に、このように人と触れ合うきっかけを与えたいと思っています。そうすれば誰もが必ず互いの国に好印象をもてるはずで、そしてこのことを伝えて、機会を作っていくのはこの日集った私たちであり、私たちの使命だと確認しあうことが出来ました。

2つ目は、日中は兄弟のような関係であるということです。揚州では大明寺へ行き鑑真の境涯を知り、上海では魯迅の故居、魯迅記念館へ行き、魯迅の文学や思想、生涯を学び、ともに歴史に残る日中の関係を深く知ることができました。魯迅記念館での、日本と中国は兄弟のようで、たとえ、不満や憎しみが生まれても、会えばそれらは忘れられるものであるといった魯迅の言葉が心に残っています。魯迅と内山完造のような親友関係に中国と日本もなっていけたらと思います。次は私が中国人の友達を増やし、日中友好の道を開いていく番だと感じました。

3つ目に、誰もが一期一会の出会いを重ねる「民間大使」として日中友好を築くことができるということです。中国研修の全体を通してやはり一番印象に残ったのは”出会い”でした。研修前日に日本の中国大使館で表彰式が行われた時、程永華大使にお越しいただきました。その時の程大使は挨拶の中で、「これから中国に行くあなた達には日本と中国をつなぐ『民間大使』になっていただきたい」と言われ、その翌日からの中国研修で私は、様々な場所で出会う人々との交流を大切にして、必ず日中の友好に少しでもつなげていこうと決意したのです。研修3日目、中国外文局で人民中国の方々にお会いした時、一冊の雑誌を作るのにこんなにも多くの人の思いや苦勞を知りました。絶対に私が人民中国の愛読者となって、周りの友達も巻き込んで読んで中国をもっと知っていこうと決めました。研修6日目、森ビルの星屋さん上海青年一行にお会いし、

お話を聞く中で、21世紀、22世紀と未来の日中友好を担っていくのは私たち若者の役目だということを実感しました。このように出会いは私の中国に対する思いを強くし、日中友好への決意を大きくしていきました。

すべて、今しかない一期一会の出会いです。スーパーのレジで出会った人との会話、北京、揚州、上海それぞれのホテルで、受付の人と交わした挨拶、レストランでチャイナ服を着たお姉さんが運んでくれた美味しい料理、狭い道を歩いていた時に譲ってくれたお兄さんの笑顔、そして研修の企画・運営と、最初から最後までずっと一緒にいて支えてくれた家族のような人民中国をはじめとするみなさんの優しさ、中国人と触れ合った場面が忘れない思い出です。これらは普段新聞やテレビでは知ることの出来ないホンモノの中国です。私は本当に素晴らしい経験をさせてもらったとともに、出会ったすべての人へ感謝で尽きません。目の前にいる一人一人との出会いを大切に「民間大使」として、私はこれらの出会いを生涯忘れず、永遠に多くの人にホンモノの中国を伝えていきたいと思えます。日中友好のため、そして世界平和へ貢献のために、今回の訪中研修で得たものすべてを活かしていきたいです。

## 初めて感じた中国

大妻女子大学 人間関係学部 濱田 麻衣



昨年2015年の夏に初めて訪中して以降、わたしと中国の関係は深まっていった。初訪中の際は、北京・太原・杭州の三都市を回ったが、その時は初めての中国だったので、見るもの感じるものすべてが新鮮であった。その初訪中で中国への関心を持ち始めた私は、今年2016年2月から1年間の中国留学を決意して今に至るわけだが、訪れた地での学びはやはり新鮮なものであった。私が留学を決意した第一目的である“中国を理解する”。この目的を果たすべく、上海を離れ、様々な都市へと足を伸ばし、できる限り中国を理解するために努力をしてきたはずだったが、私にとって上海での生活が約8ヵ月を過ぎようとしているにも関わらず、上海での体験はやはり新鮮なものであった。

この旅で特に印象に残っているのは、寝台列車で北京から揚州へ向かっている車内だ。車内では、揚州在住の方々とお話する事が出来た。その際、井ノ下さんが大学で書道を学んでいる事と、その方の夫が書道家という共通点から、書道の話で盛り上がった。書道は日中両国にある文化だが、字体や書き方などは日中双方での共通点・相違点があり、この話題から日中の間では様々な方面で繋がりがあると改めて気付かされた。このような出来事から、中国にいるからこそその出会いがあり、そこで感じる事一つ一つが日本では感じる体験する事が出来ない事が多いので、私にとって、今回の中国研修旅行は、日本と中国の関係を考えさせられる旅であった。

正直に述べると、この旅で初めて反日感情を言葉で表現された出来事があった。書籍や友人の話などでは知っていたが、自分自身が経験する事に関しては初めてだったので、日本・日本人を否定されたような感覚はとても悲しく、ショックが大きかった。しかし、実際に面と向かって話された事で、私は書籍や他人が経験した事ではなく、現実を知る事ができた。良くない事だが、この思いを一生忘れず日中友好関係が更に良い関係になるよう、そして、このような感情をお互い抱かない未来を創るため、精一杯努力していきたいと強く思うようになった。



今回は私にとって2回目の訪中でした。現在中国語を勉強する自分にとって、初めてのパンダ杯での日中交流はかけがえのない思い出であり、中国語学習への大きな原動力となっていました。その当時はまだ中国語学習を始めたばかりで、訪中の際も中々中国語を使うことができませんでした。しかし前回中国に訪れた時、現地の中国人のあたたかいもてなしや、友人との出会いなど忘れがたい思い出を築くことができ、来年は更に飛躍をすることを誓い、現在に至りました。

幸運にも、自ら勝ち取ることができた2回目のパンダ杯。訪中2日目に伺わせていただいた人民中国社員宅では、人民中国の社員さんが人生で味わったことのないほどの美味しい中国料理をたくさん振舞ってくださりました。ほぼ初対面である私たちに、お家にまで招いてくださり、前々から準備をして、とっておきの手料理で歓迎してくださった。これほどまで歓迎をしてくださった真心に、ただただ感動してなりませんでした。私はたまたま2回、パンダ杯訪中旅行に参加することができましたが、正直、次はいつお会いできるかもわからないですし、もしかしたら二度とお会いできないかもしれません。そう思うと、一人一人との出会いがたまらなく愛おしく感じられました。今回の訪中旅行では、たくさんの中国人のあたたかさに触れました。例えば、ホテルを清掃してくれる方とのやりとりであったり、空港で一人困っている際に助けてくれた中国人のスタッフ。中国人民大学の討論会の後、突然出会い、すぐ仲良くなり、別れ際中国のお土産をくださった女の子。その一つ一つの出会いが一期一会で、今も思い出しては心があたたかくなります。

また、今回の訪中旅行で、自身の中国語能力も試すことができました。まだまだ自分の中国語能力なさを痛感させられた旅でもありましたが、益々中国語学習へのおもいは高まるばかりです。1年後、2年後、3年後、そして10年後への飛躍を誓い、またパンダ杯メンバーと会えること、そしてまた、あらたな中国への発見をし続けられるように努力していきます。このような機会をくださったパンダ杯に感謝です。

### 初めての中国訪問



初めての中国訪問はたくさんの新しい発見があり、刺激いっぱいの一週間でした。自分自身の目で見て、肌で感じるのが本当に大事だということを改めて気づかされました。今回の一週間の中国研修を通して、感じたことは、現地で会う人会う人が親切でフレンドリーだということです。初日に人民大学を訪れた際、人民大学の学生がとても丁寧に学内を案内してくれました。また、寝台列車に乗ったときに同室の中国人が話しかけてきて、訪中のメンバーと楽しそうに会話していたときのことが印象に残っています。日本では新幹線などで席が隣になった人とフレンドリーに話すという事はあまりないように思います。こういった場所での人との出会いはとても素敵だなと感じました。今回一緒に行った訪中団のほとんどが中国に行ったことがあり中国語が話せる人ばかりだったので、みんなが現地の人と話している姿を見て、私も話せるようになりたいと強く思うようになりました。初めての訪問で人が親切で魅力いっぱいの中国を好きになりました。

## 目で確かめる中国

法政大学 国際文化学部 3年 長橋 侑生



「私はもう50年後の日中関係はどうなっているのか、ということを年齢の関係で決して見ることはできないんです。しかし皆さんはきっと見るができると思います。」このように語りだした星屋秀幸さんの表情を今でもはっきり覚えている。私たちが50年後に見る日中はどのようなものだろうか。

私たちは、鄧小平氏の提案によって目覚ましい発展を遂げた現在の中国しか知らない。しかし、星屋さんは79年留学当時のとても貧しい状態であった中国を知っている。それは純粋に本当に素晴らしいことであって、私は自身がもう目で確かめることのできない中国の現状に真っすぐ立ち向かってきた星屋さんを尊敬する。

私の考えはとても楽観的であって、否定する方ももしかしたらいるとは思う。しかし私は日本と中国は今後更に関係が改善され、アジアにおいて最高のパートナーとなる未来を想像する。

「できないことなんてない。」今回の訪中で頭に浮かんだのはこの一言だった。

日本には中国に対して良いイメージを持つ人がまだまだ少ない。これは情報源がメディアであること、そして「生」の中国を感じたことのない人が多いことが問題であると思う。私も以前まではその中の一人だった。もっと言えば、初めての訪中を終えた後もまだ、「その中の一人」だった。私の初めての訪中は高校2年生の時。4年前のことである。

現地の人の言葉を聞き取れない私は、日本人よりも少し大きな声で会話をしている中国人を見てはいつも、また喧嘩をしているのかと誤った認識をしていた。大気汚染が進み、霧のようなものが立ち込める北京の空に嫌気を感じ、帰国後、成田の青く澄んだ空を見て涙したこともあった。しかし、それは中国に対する知識が欠けていたからだ。訪中を重ねるにつれ、私の認識は変わっていった。中国語がある程度聞き取れるようになり、北京の街に響く声の中に中国人ならではの優しさを見つけたり、都市部の大気汚染の現状に真剣に向き合う中国人に出会ったりした。嫌いだった、北京の空に浮かぶ塵のようなものが、今回の訪中の夜にはそれらが心なしかキラキラと、何か美しいもののようにさえ見えた。これが、何も知らなかった自分と今の自分との違いだと思った。物事に損得を付けるのは良くないことだが、私にとってはやはり、知らないことは損である。だから、ただ座ったままメディアを眺めている日本人に伝えたい。実際に触れて確かめてみないと本当の中国を知ることはできない。そして「知らない」という世界がどんなに狭いのかということ。

## 「忘れ得ない思い出」

県立広島大学 経営情報学部 経営学科 3年 流森 健吉



今回の旅行日程を開いたとき、北京・上海・揚州の各都市は、どれも私にとって初めての場所ばかりで、とても嬉しくなりました。また、全国から集まった訪中団のメンバーはどんな人たちだろうかとドキドキしていました。

この度の訪中で最も印象に残ったことは、多くの人々が口にしていた「中国と日

本はこれから助け合っていく運命にある」という言葉です。このような意味の言葉をたくさんの人が形は違えども口にしていたと思います。レセプションや交流会で、中日の未来を熱く語ってくださった方々を見る度に、「こんなにも中日関係について真剣に考えている人々が、なんと多くいることか」と深く感心しました。確かに現在は中日の関係が良好とは言い難いかもしれませんが、こうした中日の友好に対する想いがある限り、未来は開けていると確信しました。

また、今回の Panda 杯を通して受賞者をはじめとする多くの友人ができたことに感謝しています。1 週間の旅行を楽しく終えることができたのは、尽力してくださった人民中国雑誌社、日本科学協会の方々はもちろん、ともに学んだ 18 名の朋友のおかげでもあると思います。この付き合いをこれからも大切にしていきたいと思います。

最後に、一生の思い出に残るこのような機会を与えてくださった、人民中国雑誌社、日本科学協会、駐日中華人民共和国大使館、各関係者の方々に感謝しています。本当にありがとうございました。

## 一期一会

### 聖心女子大学 1年 和田 葉奈



漂白された街並みの、ぱっとしない風景。歪んだ空気に揺れる街路樹は灰色の埃を被っている。白いガードレールはでこぼこ凹み、茶色い錆が顔を出す。「中国ってどんな所だろう。」と想いを馳せる私の頭に描かれる画はどれも、薄く濁った湖面に沈んでいった。相手国に対する偏った意識の浸透が、日中友好社会の実現の障壁になっている旨の作文を書き、これが運良く入賞して、中国研修旅行に参加できるのだが、フラットな眼差しを提唱していた自分こそが、反中の呪縛に縛られた犠牲者の好例のような気がして嫌気が差していた。私の 1 週間の旅はこうして初まった。

開き直って楽しむ事に決めた。中国に来たのは初めてだし、アジア文化との交流には前から興味があったのだから。能天気な私は、自分自身の心を未知との遭遇に対する期待感でいっぱいに満たした。私は単純な女なのかもしれない。

中国に到着した次の日は、中国人民大学という所の何やら頭の良い大学生と交流したのだが、正直あまり頭に入ってこなかった。どうやら、私の頭のベクトルは、観光旅行に完全シフトしたようだった。この時間、私のスイッチはオフになった。

翌日、人民中国雑誌社に見学に行ったが、感想は特に持てなかった。なんだか小学校の時の社会科見学を再体験しているようで、昼ごはんのことばかり計算している自分が情けなかった。その日の寝床は寝台列車だった。ルームメイト全員が男性で、場所も肩身も実に狭かった。「今日は我慢だ。」と覚悟を決めた時、顔の怖い車掌さんがやって来た。真顔でぼそっと何かを言った車掌さんは、何事もなかったかのように部屋を後にした。私は恐怖で顔をひきつらせながら、同室の中国語を心得ている大学生にその意味を聞いた。大学生は微笑みながら、「荷物の盗難には気をつけてねって言うてくれたんだよ。」と教えてくれた。ドアの方を振り返った私は、この地にほのかに漂う温かな香りを感じた気がした。「笑顔が欲しいな。」私はくすりと笑った。

4 日目は文化遺産をめぐる。瘦西湖の水は周囲の木々を飲み込むほどの緑に染まり、奇妙な非現実感を生む。その空気の中では、周囲の音が不自然な響き方をした。私の砂を踏みしめる足音

は、距離や響きにとらわれず、耳元で大きな音を立てていた。乾いた音がばらばらと近づいて来ているのを感じた小動物たちは、肩を並べて息をひそめた。時の流れを静かに緩める伝統的空間は、私の心の回転をゆっくりと止め、眼前に広がる美しい景色が、私の胸に新しい空気を送り込んだ。故郷の海で、潮の流れが変わる時もこんな匂いがしていた。

その日の夜私は、この研修で出会った友人と近隣の散策に出かけた。人通りの少ない薄暗い通りを歩いていると、ある店にたどり着いた。ぼんやりと浮き上がるその明かりに怪しささえ感じたが、意を決して入ってみた。入るとすぐに店員が駆け寄って来て、中国語でけたたましく話しかけてきた。私たちは、その語勢と理解できない中国語に、戸惑いと同時に恐怖を感じた。中国語を学び始めてまだ日の浅い私は、店員の言葉を理解できず、店員の威圧感から勝手に想像して、私が日本人だからという理由で店から追い出されるのだと早とちりしたからだ。すると、店員が牛乳パックとペンを差し出してきて、何を書いていいかわからず、とりあえず『我们是日本人』

と自己紹介をした。すると、『你需什么?』と店員が書いて見せてきたのだが、どこか見覚えのある文章だった。その時私は、この店員は私たちが何か困っているのではないかと心配して必死に話しかけてくれていたのだと理解した。というのも、大学の中国語の授業で使う教科書のどこかでその文言を目にしていたからだ。「あなたは何が必要ですか。」言葉が通じない外国人にこれほどまで必死になってくれる中国人に始めて出会ったことは、ここ数日間、私の中で病のように広がっていた新たな想いに輪郭を与えた。私の心で、中国に対する考え方がプラスに変わる音がした。引き潮のあとの潮鳴りが胸を打つように。

メディアの情報と先入観だけで構成された中国のイメージが一気に崩され、親中の感情が芽生えたのだ。この日を境に、中国の好ましくないと思っていた所のさえも、自己の中で精製し良い面として還元できるようになったことは、これらを象徴する大きな変化とも言えよう。例えば、あれほど気に障った中国人独特の話口調も、最も人口が多い当該国では、騒音や雑音に負けずに自分の主張をはっきり言わなければ相手に伝わらないからであり、中国語を学んでいるとよく分かるのだが、中国語ははっきり発音しなければ意味が伝わらないからである、という民族性等に依拠した理由で受け入れることができるようになっていたのだ。

6日目は主に、魯迅と出会った1日だった。記念館などをめぐり、なんだか夏目漱石に似ているな、などと考えて過ごしていた。ともに西洋文化を積極的に摂取しようと努め、各国の近代国家の枠組み構築に大きく貢献した。彼らは、新たな思想に臆することなく挑戦し先入観なく触れ合うことで、その真理を我がものとした。日中友好という舞台において、彼らの時代で言う西洋由来の先進万物とは友好そのものなのかもしれない。相手国に対する凝り固まったドグマの檻から抜け出し新しい見方を見出した時、日中関係を好転させる新たな時代の枠組みの構築が始まるだろう。それは、日中両国にとどまらず、世界規模の大きな希望を生み出すに違いない。中国研修旅行で最後のツアー日に、イベント主催者がここへ私たちを連れて来たのにはそういうメッセージが込められていたのではないかと思った。

明るく煌めく摩天楼を引き立てる漆黒の空は、大きな海を越えて、ここ日本の美しき夜景へ導かれる。ひとつの綺麗な星空の下、共存することを運命づけられた私たちは、数多の軋轢を越えて親しくあるべき定めであり、そして、それを先駆ける若年層の筆頭としての使命感を己に課し、日中友好の架け橋となるのが私の役割である。

## 訪中研修旅行の感想

東北大学大学院工学研究科 ロッケンバッハ 怜



今回の訪中研修旅行では、北京、揚州、上海の三都市を訪問し、貴重な体験をさせていただきました。北京では、万里の長城を訪れたことや、中国人民大学の学生や人民中国雑誌社社員の方々と心の温まる交流が、そして揚州では、日中間に仏教を通してつながりを作った、鑑真和上の時代の伝統的な歴史文化や自然が印象に残りました。また、上海では、活躍されている日本の方々との交流などから、中国経済中心都市のダイナミックな躍動感を感じられました。

私は、この旅行で訪問した都市と共に、多くの日中両国の方との出会いが特に心に残っています。現在進行形で日中両国の相互理解や相互発展に尽力されている方々や、様々な形で日中両国に関心を持った青年たちなどと多く交流したことは、この先忘れることはないと思います。今回、私たちは日本人中国人関係なく短時間で打ち解けて、楽しい時間を過ごすことができました。これは、誰もが相手を尊重する思いやりの姿勢を持っていたからこそ可能だったと思います。日中関係で負の面が強調されがちではある今日このごろではありますが、私たち一人ひとりがこのような姿勢を持ち続けられれば、文化や言語などの差異を乗り越えて相互理解に繋がり、そこから日中友好の明るい未来を作っていくことができるのだと思います。

最後になりますが、この素晴らしい訪中研修旅行をサポートして頂いた人民中国雑誌社、日本科学協会、中華人民共和国駐日本国大使館をはじめとする関係者の皆様にお礼を申し上げます。

## 我喜欢中国

お茶の水女子大学 文教育学部 1年 齋藤 萌香



「本当は帰りたくなかった。もっと長く、中国にいたかった。」帰国して一番に、頭によぎった言葉だ。

今まで、家族旅行や修学旅行で様々な国へ行ってきた。しかしその中で、今回の中国研修旅行は群を抜いて有意義で楽しいものとなった。その大きな理由の一つは、“自分の意思で行きたいと思った旅行”だったことだ。見るもの一つ一つが鮮明に映った上に、能動的に吸収しているという実感があった。

例えば、北京に住まわれている人民中国社の方のお宅訪問。初対面の人間をこんなにも温かく迎えてくれるものなのか、とひどく感動した。ご主人は料亭を営んでいるらしく、出てきた料理はどれもむせび泣く程おいしかった。私のお気に入り、黄金色をしたとろとろの揚げ茄子だ。料理の数々を見て、私は今まで本当の中華料理を食べたことがなかったのだな、と思わされた。

また、揚州で瘦西湖の周りや庭園を歩いたことも、大切な思い出となった。天気が良かったこともあり、そこでの風景は私に「ここにずっといたい。」と思わせるのに充分だった。湖、しだれ柳、小さな舟、書画……。中国の美が、そこにはあった。お散歩に来ていた母親が、小さな子どもを叱りなだめる。そんな光景すらも、微笑ましく思えたのだ。

そして最後の夜は、みんなで火鍋をつついた。今回の Panda 杯で審査員となってくださった現地の方も駆けつけ、非常に賑やかな晩餐会となった。会の終盤、審査員の方が乾杯の音頭をとっ

た。彼の大きな「喜欢中国吗～？」という合図の後、全員で「喜欢中国～！！」と叫んだ。その空間は、私たち同士の絆と中国への愛で溢れていた。溺れそうなほどに。

他にも楽しかったこと、感動したことはたくさんある。そのどれもが、生涯を通じて何か重要な意味を持つことになるだろう。

ただ一つ悔しかったことは、私がまだあまり中国語を話せないため、現地の方々と直接コミュニケーションを図れなかったことだ。中国の人たちは日本にとっても興味を持ってきているし、日本語を流暢に話す人もたくさんいる。それなのに自分はこれでいいのか、とやや自責の念を抱いた。この気持ちを燃料に、これから中国語の習得に力を入れていこうと思っている。揚州博物館で書道をしていた方からいただいた小さな紙に、美しい楷書でこう書かれていた。「让美丽发芽、你需要耐心播种。」美しい芽を出すには、こつこつと種を蒔かねばならない。そういった意味の言葉だ。どんなことについても言えるが、私はこれを自身の中国語学習へのエールだと受け取った。読み書きができるだけでなく、実際に中国の方とコミュニケーションをして何かお互いの国に良い影響を与えることが少しでもできれば、本望だ。

今回の旅行を企画・実行して下さった方々、北京の学生や社員の方、新しく出会った友人、すべての方に感謝しつつ、名残惜しくもあの夢のような一週間を、思い出の箱に仕舞う。